

夏目小兵衛直克

横松和平太

夏目金之助は、父親について手紙の中でこんなことを書いている。

「世の中に何がつまらないといって、おとつさんになる程つまらないものはない。又おとつさんを持つより厄介な事はない。僕は親父で散々手コズツタ。不思議な事はおやぢが死んでも悲しくも何ともない。旧幕時代なら親不孝の罪を以て火あぶりにでもなる倅せがれだね」

弟子小宮豊隆宛の明治39年(1906)12月22日付けの手紙だ。この前年に夏目漱石として『我輩は猫である』を執筆、この年も『坊ちゃん』『草枕』を発表、一躍人気作家となっていた。人間関係というのは、たとえ親子であっても愛情溢れる関係とは必ずしもならないのが、この世の常、憎しみあう家族も多い。しかしこの言いようは只事ではない。文豪漱石をしてか斯く言わしめた彼の父親とは一体どんな人物だったのか、そして二人には如何なる葛藤があったのか？彼らの人生の断面をのぞいてみたくなってきたのだった。

町方名主・夏目小兵衛

漱石こと夏目金之助の父親夏目小兵衛こへえは、文化14年(1817)に夏目小兵衛直基こへえなもとの子として生まれた。弟は牛込築土の名主高田家の養子となった作次郎という。夏目家は元禄時代から豊島郡牛籠村うしごめに住み、代々「名主役被仰付なぬしやくおおせつけられ」という江戸牛込馬場下横町の旧家であった。馬場下とは高田の馬場の下にあるという意味で、当時は江戸のはずれにある辺鄙な場所だった。とはいえ江戸町奉行配下のもと、神楽坂から高田馬場辺りまでの十一ヶ町を広く支配していた。

町名主の役割は、奉行所からの御触れ・申し渡しの伝達、人別改めつまり戸籍管理、宗門改め、飢饉・災害に際しての町民救済活動、病人・死者・捨て子などの対応措置、消防・消化活動、道路・上下水施設の補修、訴訟事件の和解・調停、不動産の売買・譲渡、養子縁組などの証文押印などその業務は多岐に亘っていた。今でいえば、区役所、消防署、裁判所、警察署などの機能を併せ持っていた。権力もあり、役得も又あったようだ。

彼は天保3年(1832)に15歳で名主見習となった後、天保14年(1843)父が隠居した跡を受け家督相続するとともに26歳で名主となった。28歳頃に最初の妻“こと、を千駄ヶ谷の名主齊藤家より迎え、長女“さわ、次女“ふさ、が生まれた。しかし“こと、は嘉永6年(1853)に病没したようだ。死因は不明である。

天保から嘉永にかけてのこの時、世はまさに幕末に向けて内外ともに騒がしい時代であった。江戸の町方名主として、水野忠邦の天保の改革、儉約令、人返し令、町人の武芸稽古禁止などにも遭遇していたはずだ。イギリス、ロシア、アメリカと異国の船が次々と来航した頃だ。安政元年(1854)、37歳にして後妻に“ちゑ、を迎えた。彼女は当時27歳で四谷大番町の質屋鍵屋こと福田庄兵衛の娘。彼女は御殿奉公の経験が永らくあり、歌の一つも詠む品格ある人だったらしい。故あってバツイチであったが、長姉“かく“の嫁ぎ先の炭問屋高橋家の養女として後妻に入った。長男“大一、が安政3年(1856)に、次男

“栄之助、が安政5年(1858)、三男“和三郎、は安政6年(1859)と男子が続々と生まれた。更に“久吉、“ちか、と子宝に恵まれたが二人は幼児の時亡くなっている。

父のこへいなおもと小兵衛直基は嘉永5年(1853)に没した。武州多摩郡中野邑名主の堀江家の生まれ、内藤新宿の名主高松家の養子となって夏目家に迎えられた人であった。彼は道楽者だったという。「先生のお祖父さんと云ふ人は、持てるに連れて随分遊んだ人で、一代に身代を傾けた人だそうだが、死ぬ時は雑司が谷鬼子母神の茗荷屋で酒の上で頓死をしたといふことだ。」(森田草平『夏目漱石氏の一生』)

だが、子のこへい小兵衛は親の生き様を反面教師としたのか、酒は一滴も吞まず世の荒波を乗り越え、身上を盛り返し家を裕福にしていたようだ。名主は権威があり相当収入もあって派手な暮らしぶりを伺わせる思い出話を、漱石達は伝え聞いていた。

「見付を出て一步牛込の方へ入ると、それ馬場下の名主様がおいでになつたつて、泣く子をおどした位のものだったと申しますが、…」(夏目鏡子述『漱石の思ひ出』)

「尤も私の家も侍分ではなかった。派出な付合つきあひをしなければならぬ名主といふ町人であった。…若い自分には、一中節を習ったり、馴染なじみの女に縮緬の積夜具をして遣ったりしたのでそうである。」(『硝子戸の中』)、

「そして名主交際つきあいで廓くわへなんか遊びに行っても、外ほかの名主は当時の金で三百円も積夜具にかけて、大尽風だいじんを吹かしてそれを誇ったりするのを、いい頃加減にこそこそ座を外して来て、遊びに使った金だと思ってこれを買はふというあんばい按排に、書画などを集めてみたそうです。」(夏目鏡子述『漱石の思ひ出』)小兵衛は、堅実にコツコツやる人でもあったようだ。

娘たちが、猿若町へ芝居を見に行く話も『硝子戸の中』には書かれている。夜半よなかから起きて支度をし、下男を供に屋形船に乗って隅田川を今戸へ乗りつけ、歩いて芝居小屋へ繰り出した。芝居の幕間にはひいき鬮屋の役者の楽屋を訪ねたりした。江戸時代の芝居見物だから帰りは深夜に及んだという。豪奢ごうしゃな光景ではないか。

だが一方で、名主の体面を保つ為には、それなりに出費もかさむ苦勞もあったようだ。「名主は綺麗に金を使う必要もあったらうと思う。例えば自分の娘たちを芝居にやって、その娘たちが、…ちやほやされるためには…それ相当の付け届けもしてあったはずである。…」(小宮豊隆『夏目漱石』)

名主の小兵衛は、それなりにつましく生活し着実に財産を殖やしていったようだ。

『硝子戸の中』のこんなくだりがある。

「御一新のすぐ前頃に、家に抜き身の夜盗の一団が押し入り、軍用金を貸せと脅された。土蔵の中の千両箱は空だったが、財布の中にあった五十両を渋々渡したらしい」(要約)

「青山に田地があって、基所から上ってくる米だけでも、家のものが食うには不足がなかったと聞いた。」旧幕時代の名主さまの生活はとても豊かなものだったようだ。

先代がとうじん蕩尽し傾けた家産を、苦勞しながら一代で再建した小兵衛であった。

慶応3年(1867)2月9日、後の漱石こと金之助はそんな名主の家に五男として生まれた。父・小兵衛50歳、母・ち糸41歳。高齢出産で恥じかきっ子であった。長男・大一11歳(既

に名主役見習修行中であつた)、次男・栄之助9歳、三男・和三郎8歳という兄達が家にいた。先妻との間の長女・さわ23歳は器量よしで大変な利口者であつたというが、既に家にはいなかった。最初の夫が気に入らずすぐ出戻り、内藤新宿の遊女屋・伊豆橋に嫁していた。伊豆橋はち糸の次姉“ひさ”が婿をとって継いでいた鍵屋が経営しており、亭主の名前は代々の名前である福田庄兵衛であつた。相愛の仲であつたという。

次女ふさ18歳は未だ片付かず家にいたようだ。この人は、明るい性格でおしゃべりだが、不器用で家事などは苦手、生活も派手好きな女であつたという。

両親は、金之助を生後間もなく里子に出してしまった。先行き不安な幕末の動乱期に、これ以上子供を抱え込むのが大変だったのか、母親に乳が出なかったからなのか、元來親が子供が好きでなかったからなのか。おそらくそのいづれでもあつたのだろう。

元氣よく泣き叫ぶ金之助の誕生は、名主夏目小兵衛の家に新時代の誕生にともなう激変をもたらす予兆となつた。

区長・夏目直克^{なおかつ}

明治維新により江戸から東京に変わり行政制度も大変革されることになつた。明治2年(1869)3月10日、東京府庁に名主283名が呼び出されたが、その中に夏目小兵衛もいた。一同御役御免となり、名主制度は廃止。翌日、100名が新たに町年寄に任命され、それ以外は解雇された。大リストラであつた。東京市中を50番組(区)に分け、各組に中年寄・添年寄をおいた。そのうち5組を纏める役職として中年寄世話掛8名、更に上位の纏め役として世話掛肝煎2名を置くことになつた。夏目小兵衛は26番組の中年寄世話掛となり牛込など33町、人口約13200人の支配役を命じられた。この時、東京市全体では982町、人口約50万人あつた。給料は月割33両。従来は名主の居宅が役所であつたが、町用取扱所を設け切り離した。「式台のついた厳めしい玄関付きの家」で「式台を上つた所に、突棒や、袖搦や刺股や、又古ぼけた馬上提灯などが、並んで懸けてあつた」(『硝子戸の中』)という小兵衛の屋敷への人の出入りも減っていったと思われる。新しい町用取扱所は、筆筒町に恐らく設けられ、そこが明治11年(1878)に旧牛込区役所となつたのであろう。そこは昭和15年まで続いた。明治4年5月、最初の戸籍法が発布され、新しい区画が制定され、各区毎に戸長、副戸長が任命された。明治5年5月、正式に庄屋・名主・年寄らの称号を廃止。翌6月には太政官布告「従来通称名乗両様相用来候輩、自今一名タルベキ事」が出た。これにより、夏目小兵衛直克は、夏目直克を名乗ることとなつた。明治6年12月には、戸長世話係が廃止されて、6大区市政に改正となつた。夏目直克は4大区の区長に任命され、11小区156町を管掌した。今で云えば新宿区長以上であり、区長の月俸は45円だった。身分は平民で、名称は変われども、旧名主時代と実質余り変わらない地位と収入があつた。士族の中には世の中激変の中没落したものが多かつたというこの時代にあつて、この頃が直克の人生で最も良かった時代だったかもしれない。家から牛込神楽坂の役所まで、毎日徒歩通勤した。家の前の通りを夏目坂と名付け、町名を夏目家の紋の井桁に菊に^{ちな}因み馬場下横町から^{きくい}喜久井町に変えたのも彼の仕事だろう。

区長として多忙な生活の一方、家庭内では末子の金之助を里子から戻した後、今度は内藤新宿の太宗寺門前名主塩原家に養子に出すことにした。明治元年(1868)11月(異説あり)の事という。主は昌之助29歳、妻やすは同年であった。二人とも若い頃から夏目家に面倒を見てもらい世話になっていた。二人の仲人も小兵衛であった。子供がいなかったので、貰い受けることにした。子沢山の夏目家は荷が軽くなり、塩原家は将来面倒を見てもらえる跡取りができてうれしいという次第であった。しかし、当の金之助にとっては後々の人格形成や人生に大きな影響を与える一大事となったが、誰もまだ知る由も無かった。

長男大一(のち大助)は明治2年(1869)3月まで名主役見習を務めた後、牛込村戸長となりその後辞職したと家系図にあるらしいが、職権を濫用したが上手くいかなかったということかも。大一はその時未だ13歳でしかない。父親として家督を継がせたい長男には期するところがあったと思う。翌3年からは、英学の個人教授を付け、文部省南校を経て明治5年(1872)に第一番中学、更に大学南校に進学させている。新時代としてのキャリアを付けさせたかったのだろう。だが、卒業の一年前の明治7年(1874)頃、18歳にして当時では不治の病と言われた肺病で退学したという。このことは夏目家にやがて暗い影を落すことになる。次男・栄之助(直則)は電信修技学校に学んだ後、明治7年(1874)頃に16歳で秋田県電信局勤めになったとある。しかし何故か同9年には開成学校に入学していたという資料があった。これは三男和三郎(直矩)のことではなからうか？。又、明治7・8年頃までには次女・ふさを甥の高田庄吉のところに嫁がせていたようだ。夫婦は近くの行願寺ぎょうがんじの境内に家を構えていた。長女・さわ夫婦は、維新後に遊女屋の方は倡妓を開放し廃業し質屋で稼いでいた。住まいは、小兵衛の馬場下の長屋とし、そこで贅沢な生活をしていたという。子供の教育、娘の嫁入り等何かと出費もかさんだことであろう。

塩原金之助

そんな頃、明治8年(1875)末から翌9年(1876)初めまでと推定されるが(諸説あり)、塩原に養子に出していた金之助を籍は戻さないまま家に引き取ることとなった。当時、塩原は浅草周辺の戸長をしていたが、旧旗本の未亡人と不倫関係となり妻との間が不和となっていた。ゴタゴタした挙句結局離縁となり、昌之助も戸長をクビになり失職したことも原因だろう。彼はその後の職の斡旋を依頼に来て直克と大喧嘩し、激怒されたともいうが、暫くして警視庁に月俸25円で再就職できたようだ、直克が結局面倒を見たのだろう。

9歳にして生家に戻され、それまで御爺さん・御婆さんだと聞かされていた人が、実は御父おとつさんと御母おつかさん(60歳と51歳の老夫婦)だと、下女から聞かされて嬉しかったという話が、『硝子戸の中』の中にある。一方、自伝的な小説『道草』ではこの時のことを次のように描写している。

「実家の父にとっての健三は、小さな一個の邪魔者であった。何しにこんな出来損ないが舞い込んで来たかという顔付をした父は、殆ど子としての待遇を与えなかった。今までと打って変わった父のこの態度が、生うみの父に対する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつ

くした。…」これまでは、養父母の手前いつもにこにこしていた直克が、実家に戻って来ると掌を返すような冷たい態度をとったことに、激しい憤りを憶えたようだ。子供はいつも鋭い感性を ているものだ。

「子供を沢山^も有っていた彼の父は、毫も健三^{かか}に依怙^かの気がなかった。今に世話になるうというのに、金を掛けるのは一銭でも惜しかった。繋がる親子の縁で仕方なしに引き取ったようなものの、飯を食わせる以外に、面倒を見て遣^やるのは、ただ損になるだけであつた。」 「食わずだけは仕方がないから食わして遣^やる。しかしその外^{ほか}の事は此方^{こつち}じゃ構えない。先方^{むこう}でするのが当然だ。」(実際、この後学費や小遣いなどの面倒は養家がみたようだ。)籍を戻さなかったのは、塩原にも、将来金之助が稼ぐようになったら、又引き取り役立てようという計算があつたからであろう。しかしこのことが、この先厄介の元となっていくことになる。幕末から明治にかけてのこの時代、庶民にとっては自分の子供を養うことは、将来自分が面倒を見てもらいたいからである。親が子供に金をかけるのは、資本を投下してやがて利息を受け取るようなものと考えていた。利息を回収出来る見込みのない代物を抱え込んでしまったという思いが、直克の正直な気持ちだったのであろうか。

『坊っちゃん』では、「おやぢは些^{ちつ}ともおれを可愛^{ちつ}がって呉れなかつた。(中略)おれを見る度にどうせ碌^{ろく}なものにはならないと、おやぢが云つた。」と書いている。弟子の森田草平は、「阿父^おさんは、腕白^わで、依怙^{いこじ}地で、強情^きで、云ふことを諾^きかない此時分の先生を、時々堪り兼ねては土蔵の中へ押し入れた」「阿父^おさんは元来子供が嫌ひな」人だつたと直克のことを書いている。後々までついて廻つた親子の相克はこの頃から現れ始めていた。しかし、養子に出したあたりからもうその根源があつたと思える。動物の親子にはこうした葛藤はないだろう。“人間は本能の壊れた動物である、と、岸田秀は言っている。

金之助の場合、更に幼児期における養父母との関係が深い影を落としてしているようだ。養父母は、金之助を我儘^{わがまま}し放題に甘やかして可愛^{ちつ}いがつた。しかしそれは純粋な愛情からではなく打算からであり、親切と恩の押し売りであつた。金之助はそこを本能的に見抜いていた。本当の愛情に触れぬまま、抑うつされたことが『道草』を読むと良くわかる。

漱石となつた金之助が家庭を持った後年、彼は家庭内では狂気を発したことが知られている。子供達への虐待、異常な怒り、幻聴、追跡妄想などの症状があつたという。発症の引き金になつたのは持病の胃潰瘍が悪化した時だつたらしいのだが、その因果関係には“ドーパミン、という脳内麻薬が関係しているという説がある。それはともかく、養母・やすという女の性格・言動による体験が金之助に大きなトラウマを与えたのではないかという見方もある。彼女は、ケチでやきもちやき、猜疑心がとても強く、嘘をつくのが巧みであつたという。夫の昌之助の浮気に際しての、陰険で執拗な攻撃、虐待、あるいは嫌がらせなどを目撃するという体験だつた。この抑圧された記憶が、甦り再現・復元されたのが漱石の精神分裂病的な狂気だつたという。一歩間違えば、自我が崩壊し、本当の狂人となつていたかもしれなかつた。しかし、漱石は小説・絵画・漢詩・俳句などの創作活動でこれを自ら治療、克服した人であつた。本当の愛情に飢えても、歪んだ幼児期の体験に潰されることもなく、正気を取り戻し文豪にまでなつたところが常人とは違つたのである。

警視属・夏目直克

この年、明治9年10月、直克は60歳にして大区長を辞職することになった。金之助を引き取った時の言動の背景には、この変化が見えていたのかも知れない。やがて収入が減ること必至であった。早く長男大助に家督を継がせ、楽隠居の身となりたかったのだろうが、扶養して貰うどころか、彼はまだ若く病弱気味であった。そこにカネのかかる扶養者が更に増えるのは憂鬱なことに違いなかったのだ。

定年制度だが、江戸時代からそんなものはありはしなかった。武士階級であれば跡取り次第だが50歳位で家督相続し、隠居になりたがったものだという。我が国で初めて退職年齢を定めたのは明治20年(1887)の海軍火薬製造所の「職工規則」という。年齢は55歳。20歳での平均余命が40年を切っていた時代であり、高齢化による肉体労働能力の低下が背景にあった。制度化が進むのは昭和初期のこと、金融恐慌から昭和恐慌へと続く不況の時代に雇用調整の手段として民間で定着していった。55歳定年制は戦後まで暫く続いた。私が社会人になった時(1969年)はまだそうであった。それが今や65歳時代である。有難いと、とるかどろかは人それぞれだろうが。

区長を辞職したのち、暫くして内務省八等警視属として再就職した。月俸は20円。辞職前の区長のそれは45円だったので、半分以下となった訳である。何やら現代の勤め人の定年退職、再就職とよく似た事情のようだ。しかし、平均寿命だって今よりかなり短いはずのこの時代に、60歳にして再就職とは！ちょっと違和感を覚えるだけでなく驚きだ。区長というそれなりの地位に居たからできた事なのだろうか？この時代から天下りがあったということか？

直克が60歳にして再就職したこの頃、跡取りの大助はまだ開成学校にいた。漸く就職したのは明治12年(1879)2月、23歳のこと。就職先は警視局翻訳係、月俸40円。きっと親のコネだろう。麴町内・山下町の官舎に住んだこともあったようだ。三男の直矩は福田庄兵衛・さわと養子縁組をしていたが、明治10年(1877)10月に解消し、復籍していた。関係は定かでないが、姉・さわは翌11年(1878)1月、32歳の若さで死去している。美人薄命の例にもれないようだ。和三郎はまだ学生、末子の金之助も小学生。塩原の籍のまま再婚していた昌之助の家と実家の間を行き来していたようだ。

そんな中、焦りがあったのか資産運用に彼は失敗している。会社ゴロみみたいな男の投資話を信じてダメされ、その理由結果出資金ばかりか青山や新宿辺りの土地も人手に渡す羽目にあつたと云う。せっかく苦勞して守り抜いて来た財産を傾けてしまった。直克はどうも資産運用やビジネス感覚には少しうとい男だったようだ。馬場下辺りの火事に類焼し、土蔵を残して焼け出されたこともあった。明治13年(1880)1月のことだ。家運が徐々に傾きかけ人生の下り坂を降り始めていた。翌明治14年(1881)1月、64歳にして妻・ちゑを亡くした。享年56歳であった。家には直矩と金之助だけが残さ

れた。次男直則はこの年12月、東京局勤務となり帰京。夏目家所縁の臼井姓を名乗り同居することになった。しかし、明治16年(1883)には岡山に転勤しそこで結婚。後東京局勤務となるが病弱であった。三男直矩は一時名乗っていた臼井姓から夏目姓へ復籍していた。金之助は長兄から薫陶を受けながら明治17年から東京大学予備門に通った。彼は家がおもしろくないためか、下宿生活を度々している。

明治17年(1884)1月67歳となっていた直克は、^{ようや}漸く長男大助29歳に家督相続した。その年に彼は陸軍省文官十等出仕(月給45円)に任じられた。又、この年には官吏恩給令(明治23年に「官吏恩給法」が制定)が公布されている。一定年齢に達したら公務員は恩給という名の年金を貰えるようになった。60歳到達・退職で支給開始をするこの制度は、実質的な定年制と年金制度の始まりだ。名主時代から大区長、警視庁と役人生活の経験豊かな直克は、こうした動きを熟知していはずだ。家督相続と関係があったのかどうか。当時では極めて遅い年齢だが、^{ようや}漸く落ち着いて隠居生活に入れると思ったのではなからうか？

一方明治18年末には、大行政改革によるリストラが実施された。こんな中70歳にして、遅くとも19年(1886)初め頃までに、彼は警視庁警視属を退職した。退職金とか恩給を支給されたのではなからうか。それにしても直克は、色々事情はあったものの寿命の短いこの時代にあって、68歳まで働き続けたことになる。幸せだったのかどうか？

御隠居・直克

しかし、左団扇^{うちわ}の楽隠居とはならなかったのである。この年元来病弱であった長男、次男が相次いで病に倒れた。いずれも結核であった。直克は出来れば変わってやりたかったであろう。病人達の看護は直矩と金之助があたった。翌明治20年(1887)薬石功なく、6月までに2人は相次いで逝去した。31歳と28歳という若さでの死であった。今では考えられないが、肺結核は明治時代の死因の第2位(1位は脳卒中)である。

大助と直則の死は、夏目家の家督相続をどうするか直克を悩ませることになった。生前大助は家督を金之助に継がせたい考えであったという。父・直克も同感だったかも知れない。三男の直矩は病弱で学問嫌い、芝居見物が好きな男だった。これに比べて金之助は我儘で偏屈なところはあるが学問ができるからだった。しかし彼は籍がまだ塩原のままであったし、跡を継ぐのは嫌だといった。結局、直矩が26歳にして7月に相続することになる。その頃すでに彼は郵便局に勤めていたであろう。9月には最初の結婚をしたが、何があったのか年末には離縁となった。相手は“ふじ、数え18歳だった。翌年に“登世、と再婚。同い年の金之助は、まだ第一高等中学校の20歳の学生、成績優秀であった。

家督問題は片付いたものの、直克は相次いで肉親を失い心細い思いであった。三男は今ひとつ頼りにならない。学問ができ前途有望な金之助を手元に置いておきたくなかったのだ。家に呼び寄せるだけでなく、塩原家からの復籍を考えるようになっていた。塩原に養子に出したのは失敗だったと思っていた。たゞ、これまで金之助の学資や小遣いは先方が負担し続けていたのであり、簡単には事は運ばなかった。交渉はおそらく直矩への家督相続と

並行して、明治20年(1887)後半から行われたのであろう。間に代理人を立てて再三交渉し、翌明治21年(1888)1月に養育料240円を支払う条件で示談が成立した。但し即金は170円、残り70円は毎月30日3円ずつとした。完済したのは明治23年2月。直克は律義な役人らしく、記録をきちんと残していたことが『道草』の中に詳しく描写されている。

葬儀の連続でお金がかかった上に、この問題でいよいよ家産は傾いて行ったであろう。

だが、塩原という男は中々一筋縄ではいかないしぶとい男であったと見える。金之助本人から「就ては互いに不実不人情に相成らざる様致度存候也」との一札を入れさせた。この事実を知った直克は激怒し、後々の災いとなることを恐れた。そこで、「示後が交際出入り等一切御断及候」という文面を含む証書を塩原夫妻に入れた。愛情ではなく打算による金之助争奪戦の様相だ。かって目をかけてやったはずの後輩名主は、恩を仇で返すイヤな奴だった。お眼鏡違いだっただの。直克の心配通り、塩原昌之助は「一札」を金を強請る道具として使った。後年100円で「一札」を買取らされたことが、やはり『道草』の文中に書いてある。漱石として有名になってからのことだ。災いは忘れた頃にやって来たようだ。尤も元はといえば、直克が金之助を引取ってからも養育費をケチり、塩原に負担させたことや、復籍示談の時に示談金をケチったからだとも思える。

『漱石の思ひ出』には、老齡で隠居暮らしになってから、益々締め屋になって行った話が伺える。〈三度三度の食事の献立を自らやっていたが、女中が「ご隠居様、今晚は何に致しませう」と伺いに参りますと、「茄子でも煮ておけ」が定まり文句だった〉とか〈自分一人は茶筆筒から菓子をつまみ出しては、ぼりぼり喰べていた〉という女中の話だ。

毎月10日には、芝の金比羅様に参詣し、近くの義姉の高橋家に立寄り昼食をとる習慣があった。〈仕出し屋から刺身をとってもてなそうとすると、「あたしのために、こんなものを取るなんて、無駄な話だ。あたしはいつもの通り、ぽっくら焼でたくさんだ」といってひどく叱った。それだけをおかずにして食事を済ませ、食後に一個二銭の餅菓子をほおぼって、上機嫌で帰って行くのを常にした〉(『漱石とその時代第一部』)。茄子とかぽっくら焼(卵焼きの一種らしい)とか安いものばかりだ。駄菓子が好きだったようだ。

高田の姉さんと呼ばれていた次女ふさのところへは、毎日のように行っていた。彼女は社交家で散財家。直克おやぢは、お世辞上手にたかられるのをこぼしながらも嬉しそうだったという。『漱石の思ひ出』に、漱石が妻に「親父はけちんぼの癖に、妙に金のたまらぬ男だったと笑っていた」とあるが、うなずける話ではないか。

夏目直克と樋口則義

明治20年(1887)12月27日、樋口泉太郎が肺結核で死去した。享年24歳。父は則義57歳、妹に夏子15歳がいた。彼女は後年、奇跡の14ヶ月で樋口一葉としてブレイクした。

『たけくらべ』『にごりえ』を世に出し、明治29年24歳の若さで結核により逝去した。

この葬儀の香典帳に夏目直克、五十銭と残されており、弔問に訪れたことが判る。

直克は警視局に明治18年(1886)末頃まで勤めていたが、樋口則義は明治14年から19年までそこに勤めていた。役所仲間の縁があったのだ。彼は文政13年(1830)の生まれで、直克より13歳年下である。山梨県塩山市の農家の生まれだが生来の学問好きだったようだ。江戸で出世していた郷里の先輩を頼り、恋人と駆け落ちして出てきた。幕末の安政4年(1857)、峠を幾つか歩いて越え江戸にやってきた。先輩の伝手で、番所取調所の下働きを振出しに真面目に働き金を貯めた。慶応3年(1867)に同心株を買い幕臣となった、いわゆる金上げ侍だ。すぐに維新となったが、東京府の役人となることができた。彼は、目端の効く所があり、サイドビジネスで、羽振りの良かった時代があった。戸籍係、屋敷取調係、社寺取調係を担当、役目柄の知識や役得を生かし、不動産管理の手数料や不動産売買、金融で金を稼いだのだ。本郷の東大赤門前に方真寺脇に大きな屋敷を買って住んだこともある。ここは今日でも「桜木の宿」として知られる旧跡となっている。東京府中属を退職金を得て退官したのち、警視局雇いを経て警視属になった。そこで直克や大一と出会ったと思われる。この葬儀の年は、直克も子供達を相次いで亡くしたばかりで傷心であった。既に退職してはいたが、樋口家の訃報を聞き同じ立場に同情し弔問にやって来たと思われる。

この二人には、それぞれの息子と娘の間に縁談があったような伝説が流布している。伝説の発生元は『漱石の思ひ出』である。即ちこうである。大一は、〈「年頃ではあり、男前はよし、それに名主の長男ではあり、まずまず申分のないところから、樋口の娘にも字も立派だし、歌も作るし、第一大層な才媛がある。あれを貰ってちゃどうかといふ話が持ち上がりました。〉ところが、「樋口さんは学問もあり、こまめに立ち働き重宝に使っていたが、時々金を貸してやったものだ」「たゞの下役でさえこれ位金を借りられるのに、娘を貰ったらどうなることか」ということで、この話は立ち消えになった。〉

この話は、夏目鏡子未亡人が三男の直矩から聞いた思い出話であり、信頼できないところが多いようだ。いつ頃の話なのかが判然としないが、まず大一と夏子では年齢が合わない。直克退職前の明治18年頃でも、夏子はまだ13歳位。幾らなんでも若すぎる。大一は肺病病みであり結婚の意志はなかったといわれる。樋口則義に金を貸していた、という話もおかしい。この頃はまだ不動産の売買をやっており不自由していない。彼が落ち目になるのは息子が死に、明治21年に事業に失敗してからのことである。昔職場で顔を会わせた直克と則義が、お互いの子供の自慢話を茶飲み話か酒の席でやったことがあった。その思い出話を父から聞いた直矩が、座興で面白おかしくこしらえて話したのであろう。お金を貸した云々は、一葉の貧乏生活の話から適当に脚色した話と考えたい。逆に直克が借りる側だったかも知れないのだ。

夏子の縁談の相手が金之助であったという説もあるようだ。関川夏央・谷口ジローは『『坊っちゃん』の時代』という劇画で、「幼い頃...自分と一葉は親同士が決めたいいなづけだったと聞いたが...」と、二人の出会いを物語りにしている。年齢は合うが、金之助は籍が塩原の時代である。勝手に縁談など話題にできない相談ではなかるうか。

架空の出会いの物語の天才・山田風太郎は『警視庁草紙』で二人の出会いを描いた。

塩原昌之助に連れられた八歳の金之助が、三つの幼女なつと新宿・伊豆橋という元遊廓の赤い格子越しにあどけない会話を交わすという設定である。実に巧みな創作に舌を巻く。

晩年の直克

明治23年、直克は数えで74歳となった。同居家族は直矩夫婦に金之助。彼は、第一高等中学校の本科を7月に卒業、9月に帝国大学文科大学英文学科に入学した。秋入学の時代であった。文部省の貸費生として年額85円の支給があり、親の負担が軽くなったようだ。

この頃、直克に進路について報告した時に、こんな会話が合ったという。

〈「お前学問をするって一体何をやるんだ」「何に、軍学をやる」…父の所謂^{いわゆる}グンガクをやるうといふ頃には、…文学か軍学かわけのわからなかったお歳だったのでせうが、それでも容赦なく、「このとほりわからず屋だからいやになっちまう」などと申しておりました。〉(『漱石の思ひ出』) 単に年の所為^{せゐ}で耳が遠かっただけのことかも知れないと思えるのだが。漱石は、おやぢは頑固で学問のない男だとけなしたかったのだろう。

翌、明治24年(1891)直矩妻の登世^{つわり}が悪阻で死去する。美貌の兄嫁に金之助はただならぬ思いがあり、その死は彼に深刻な影響を与えたであろう、との説があるがどうだろう？直矩は一周忌も経たない内に、数え17歳の“みよ、と、さっさと再々婚をした。

明治25年(1892)4月、夏目家は金之助を分家扱いとし戸籍を北海道に移した。いわゆる^{いわゆる}“漱石の送籍、問題である。北海道後志国岩内郡岩内村・浅岡仁三郎方へ寄留し、北海道平民となった。浅岡氏は三井物産の御用商人であり、三井物産関係者の伝手によるものらしく、本人による自発的な行為ではないと思われる。金之助は、翌年文科大学を卒業し、春には26歳を迎えるという時節であった。何故送籍したのかについては諸説がある。

最も有名なのが徴兵忌避説だ。『漱石の思ひ出』では、「一時北海道平民といふことになつてゐたことがあるそうです。これは徴兵免除のためだつたといふことです。」これは例によって直矩あたりからの伝聞である。丸谷才一は『徴兵忌避者としての夏目漱石』でこれを取り上げ、更に罪の意識から神経衰弱の原因になったとまで云っている。明治時代の徴兵制は明治6年(1873)に導入されたが、万民に公平なものではなく、多様な免役規程があった。日清戦争の前のこの時代“徴兵のがれ、は後の軍国主義の時代とは違ってごく普通の関心事だったらしく、ノウハウ本が何冊も出ている。だが、明治22年(1889)の改正で、中等学校以上の在学者の徴兵猶予が26歳までに限定されることになった。金之助には期限切れが迫っていた訳である。そこで、対策として北海道への送籍をとった。当時北海道は開拓時代、労働力不足で兵役免除対象であった。「軍事教練」経験から、個人主義の立場で没個性的な軍隊組織を嫌った、(水川隆夫『夏目漱石と戦争』)という見方もある。

ユニークな見方として、「ホイットマン論」を彼が書いていることと関係付け「アメリカと似ている北海道の大地への憧れからだ」(林順治『漱石の秘密』)という説もあった。だが、無論漱石は生涯北海道には渡ったことはない。何故か岩内町に「文豪夏目漱石立籍地」という珍しい碑があるのみだ。

送籍の手続きは戸主の直矩が行ったようであるが、発想したのは行政に詳しい父の直克だったのではなかろうか？塩原との関係に後顧の憂いを無くす為の配慮からだと思える。

金之助本人が、この問題をどう意識していたかが分かる資料があった。

「長女の筆子が小学校で、自分の父は兵隊に行くのがいやで籍を移した、と発言したそう
だ。誰が教えたものだか、驚かされた」(半藤一利『漱石先生ぞな、もし』より要約)。直
矩と母鏡子と雑談していたのを聞いていたのだ。子供は恐ろしい。大正元年(1911)には、
『極北日本』(高原操)の序文で、「妙な関係から移した」と書き、死の翌年、大正6年
(1917)の小樽新聞の掲載記事によれば、岩内町の在郷軍人に生前送った葉書には、懲兵拒
否に関して「当時の自分のそわそわせる考えが、いまさらにはずかしき次第なり」と正直
に記している(半藤一利『続・漱石先生ぞな、もし』より)という。

『坊っちゃん』の中で「只懲役に行かないで生きて居る許りである」とも書いてもいる。
深い考えがあつてのことではなく、ただ父や兄達の進めるまますを受け入れたことだったの
だろうが、いつも頭の片隅には軽い負い目が意識されていたようだ。

明治26年(1893)7月、金之助が文科大学を卒業し、9月に高等師範学校に就職が決まる。
在学中から既に東京専門学校の講師のバイトで稼ぎ始めていたが、家から出て下宿し、本
格的に自活することになった。いつからか正確にはわからないのだが、月給の内から親は
毎月10円を貰うことになった。かつて復籍に要した費用の返済の意味もあったのか、子は
隠居した親を養うのが常識だったからかなのか。年俸450円(月給37.5円)だが、貸費金7.5
円の返済もあり、楽ではなかったであろう。この支払いは直克が亡くなるまで続いた。
日常生活は直矩が面倒をみて、小遣いを金之助が負担したということかもしれない。

金之助は、明治28年(1895)4月、愛媛県尋常中学校へ赴任、わずか1年で熊本の第五高等
学校に転じた。この間、年末に中根鏡子と見合いをし婚約した。この見合い話は、兄の直
矩の尽力によるものだ。友人の正岡升(子規)への手紙で「小生は、教育上性質上家内のもの
と気風の合わぬ昔よりの事とて、小児の自分よりドメスティック ハピネス杯^{など}いふ言は
度外に付し折候へば、今更ほしくも無之候。近頃一段と隔意を生じ候事も甚だ不本意に存
居候、…」と随分である。兄貴に世話になっていながらこうである。鏡子夫人は、「一体
夏目は生家のものに対しては、まず情愛がないと申してよかったです。有るものは軽蔑
と反感位のもので、…」(『漱石の思ひ出』)。結納が帯代として35円だった。これは熊本
では月給100円の高給取となった金之助が負担したのだろう。意地でも世話になりたくな
かったはずだ。明治29年(1896)4月、熊本での挙式には、夏目家からは誰も出ていない。
たゞ、熊本へ二人がたつ前に、喜久井町・馬場下の実家に挨拶に行き、ケジメだけはつけ
ている。「この頃は、大分左前になってみた時でせうが、それでも中々立派な庭があつて、
家はその庭から…低いところに建ててありました。聞けば火事に見舞われた時に、焼けた
土を三尺取りのけてそこへ建てたからだといふことです。お父さんや、今でも居られる兄
さん夫婦や、もう亡くなられた高田の姉さん夫婦に、其時正式に引き合わされました。」
この時、直克は79歳とかなりの老境であった。まだ達者であったのだろうか？

翌明治30年(1897)6月29日、直克が亡くなり、金之助には直矩から電報で知らされた。

「健三の父は中気で死んだ。...彼は親の死に目にさえ会わなかった」(『道草』)

死因は当時最も多かった脳卒中、80歳の長寿を全うした。金之助夫妻が上京したのは7月早々らしいが、葬儀には出たのかどうか？死に目に会えなかった、ではなく会わなかったと書いているから、出ていないのではなからうか？『坊っちゃん』には、「おやぢの葬式の時に、小日向こびなたの養源寺の座敷に...」とあるが、これは創作だ。菩提寺ぼだいじも、実際は小日向こびなたの本法寺だという。

父・直克に金之助は幼児期以来様々な葛藤から、愛情や敬意を持てなかった。父も又、金之助に対しいわゆる親らしい愛情を表現しなかった。金之助が文豪・夏目漱石として世に出ることを見られなかった。西洋文明と対峙し、近代人の自我の孤独を自覚し個人主義の確立に漱石は苦闘した。父は図らずも、ある意味文豪の誕生あずかに与った、と思いたい。

江戸から明治へ

夏目小兵衛直克は、牛込の代々名主小兵衛として馬場下に生まれた。江戸の幕末から維新の激動を体験し、明治の日清戦争の時代まで夏目直克として生きた人だった。長い役人生活を続け、6人の子供を育て上げた。妻や子供との生き別れにも遭遇した。江戸から明治は地続きだとよく言われる。直克をはじめとした夏目家の人達が暮らした、江戸から明治にかけての町の痕跡を幻視したくなり、或る日町歩きに出かけてみた。

東西線で早稲田に降りれば、そこがかつての牛込馬場下だ。夏目坂の左側に、漱石生誕の地の標柱がある。ゆるやかに牛込柳町まで登り左折し、台上の道をたどると牛込筆筒町区民センターに着く。旧牛込区役所のあったところだ。直克は区長時代ここまで徒歩で毎日通勤した道だ。家から片道およそ20分程度だ。そこから神楽坂坂上までは10分程度、下り坂の前方右手に高層ビル神楽坂アインスタワーが見える。その辺りが行願ぎょうがん(元)寺の跡地とか。高田の姉さん夫婦が住み、夏目家の人達もよく遊びに来たところだ。案外狭いエリアで暮したのだ。次に小日向こびなたの本法寺に向かった。寺前の表示板には夏目漱石の菩提寺とあるが、正しくは夏目家の菩提寺のはずだ。漱石の墓は雑司が谷にあり、ここにはない。漱石の父、母、兄、姉達が眠っているらしい。見つけるのにちょっと苦労したが、小さくて古ぼけた墓石があった。境内には漱石に関わる句碑と説明碑もあった。明治29(1896)正月、帰京中に墓詣の折詠んだ句だ。亡き母や兄大助への婚約成るの報告でもあったか。

梅の花 不肖なれども 梅の花

漱石は、母には敬愛の気持ちを捧げたが、「僕は親父で散々手コズツタ。不思議な事はおやぢが死んでも悲しくも何ともない」と父には悪態をついた。散々手こずらされたのは、むしろ直克の方ではなかったろうか？思えば父親役というのは哀しくも難しいものだ。

小日向から、小石川、春日、から本郷菊坂までさらに歩き続けた。本郷は漱石・一葉はじめ文人達に所縁のところが多い。又歩いてみたい、と思いつつ湯島で旅を終えた。

参考書籍:

『夏目漱石氏の一生』(森田草平/1917年『夏目漱石研究集成第三巻』収録)、『漱石の思ひ出』(夏目鏡子述/1929年)、『夏目漱石』(小宮豊隆/1953年)、『樋口則義と夏目直克』(塩田良平/1956年『明治大正文学研究』第19号)、『徴兵忌避者としての夏目漱石』(丸谷才一/1969年『展望』6月号)、『漱石とその時代第一部』(江藤潤/1970年)、『警視庁草紙』/『幻談大名小路』(山田風太郎/1975年)、『漱石の人とその周辺』(石川悌二/1981年)、『増補改訂版 漱石研究年表』(荒正人/1984年)、『漱石先生ぞな、もし(正・続)』(半藤一利/1992年)、『極北日本序文』(『漱石全集第16巻 評論他』収録 1995年)、『漱石全集第22巻 書簡 収録』(1996年)、『坊っちゃんの時代第5部 不機嫌亭漱石』(関川夏央・谷口ジロー/2003年)、『夏目漱石と戦争』(水川隆夫/2010年)、『漱石の秘密』(林順治/2011年)、『道草』『硝子戸の中』『坊っちゃん』(夏目漱石)等

参考WEBサイト資料:

「江戸町名主&直参旗本今昔物語」(黒岩博之)、「漱石に発生した精神異常の謎」(加藤敏夫)、
「漱石研究傍注一夏目小兵衛は塩原昌之助の後見人だったかー」(佐々木 充/千葉大学教育学部研究紀要)
「一葉の父・樋口則義 方真寺の桜」(桜の会)、
他に「昔の死因、年金制度のあゆみ、家督相続、徴兵制度」他多数。

2013・2・16(了)